

ラジオホームドクター

2023/7/7 「新型コロナウイルス感染症が五類となって2ヶ月が経ちました」

新型コロナウイルス感染症が、5月7日からそれまでの2類相当から5類に変更され、ちょうど2か月を経過しました。これを機会に、現在の感染状況、今後の新型コロナを含めた感染症の動向の予測をお話したいと思います。

新型コロナウイルス感染症は、新たな変異株が発生するとともに流行の波を繰り返し、昨年春は第6波でオミクロン株 BA1 系統が流行、昨年夏は第7波でオミクロン株 BA5 系統が流行、今年1月は第8波でオミクロン株 BA5 系統とその亜型が流行しました。すでに欧米では、BA5 系統は減少し BQ1 系統、XBB 系統へ置き変わっています。この2系統はすでにわが国においても検出され、徐々に増加しています。今後これが第9波になるかどうかはわかりませんが注視する必要があります。

さて、岐阜県ではこれまでにどのくらいの方が新型コロナに感染し、抗体を獲得しているのでしょうか。ひとつの指標として累積患者数があります。5類に変わる直前の5月6日まで行われていた新型コロナ患者の全数把握における、岐阜県での累積感染者数は、545060人でした。この感染者数は人口比で28.2%となります。複数回感染した方もみえるので、正確ではないですが、少なくとも県民の4人に1人はすでに感染したということになります。もう一つの指標が、抗N抗体の保有率になります。抗N抗体は、新形コロナに感染した際の血液から検出され、ワクチンによる免疫では検出されません。献血の際に得られた血液検体の抗N抗体保有率は、第8波流行の直前の昨年11月の調査では、岐阜県は全国で低い方から4位の14.9%でしたが、第8波流行直後には48.3%と全国でも高いほうの部類となりました。岐阜県ではこの冬の第8波で感染した方が非常に多かったことが推察されます。

現在の感染状況については、2つの指標があります。全国各県の行政定点と言われる医療機関が1週間に診断した新型コロナ患者数をまとめて報告し、それを県ごとに、1医療機関の1週あたりの患者数として発表するものです。この方法は各県ごとの患者数の比較することに適しています。2つめは岐阜県と岐阜県医師会が行っている、サーベイランス事業です。登録している医療機関が、診断した新規患者数を毎日入力します。毎日報告され、その翌日までに1医療機関の1週あたりの患者数として発表し、HPで公開されます。行政定点での調査が、参加医療機関数が少なく、かつ週に1回の報告であるのに対して、速報性に優れており日ごとの患者数の増減を把握することに適しています。しかしここで注意すべきは行政定点とサーベイランスでの参加医療機関が異なっていることです。そのため、行政定点の発表値とサーベイランスの発表値の直接比較はできないことに留意が必要です。

新型コロナに伴うマスク生活は、コロナに限らず呼吸器感染症を減少させました。インフル

エンザも少ない状態が続いていましたが、今年は初夏である今になっても、まだインフルエンザの患者が少ないながらも発生し続けています。この様相は、1年前のアメリカの状況に似ているとされています。昨年、アメリカでは夏までインフルエンザ患者の発生がありました。その後、昨年冬から今年の春にかけて、インフルエンザが大流行となり、3000人以上の死者が出ました。わが国でも、3年にわたってインフルエンザの流行がなく、人々の免疫が低下していることもあって、今年の冬はインフルエンザが流行する可能性が高いと予想されます。さらに、もともとコロナウイルスは冬に流行する傾向があり、新型コロナも冬になって、再び流行する可能性があります。今年の冬は、インフルエンザ、新型コロナとも予防接種などでしっかりと対策をしておくことが良いと思われます。

新型コロナワクチンは、今年は5月から、65歳以上の方、それ以下の年齢であるが基礎疾患のあるかたへの接種が、努力義務と接種勧奨ありで、また医療従事者等には努力義務接種勧奨なしでの接種として始まっています。秋からは5歳以上のすべての方への接種が始まります。高齢者等以外には接種勧奨はありませんが、接種券が届いたときのために、ご自分やご家族はどうするか、少しずつ考えておいていただきたいと思います。